〈書　評〉

Jonas Kurlberg, *Christian Modernism in an Age of Totalitarianism: T. S. Eliot, Karl Mannheim and the Moot* (London: Bloomsbury Academic, 2019)

山　田　竜　作

Ⅰ

1938年から1947年まで、第２次世界大戦をはさむ約10年間に全24回の研究会合を開いた、英国在住のキリスト教知識人を中心とするグループ「ムート」(the Moot)。神学者Ｊ・Ｈ・オールダムを主催者とするこの知識人グループの思想と活動については、これまで断片的に言及されることはあったものの、その全貌を明らかにするまとまった研究は存在しなかったと言える。それでも21世紀に入り、神学者や英国文化史・知識人史の研究者たちのあいだで、この「ムート」についてのさまざま掘り起しや検討が徐々に進んでいるのも事実である。そのような中、モダニズムと全体主義という観点から「ムート」にアプローチする研究書が刊行された。それが本書である。著者のヨナス・クールベルクは英国ダラム大学に籍を置く若手の神学者で、本書はブルームズベリー社の「モダニズムの歴史化」(Historicizing Modernism) シリーズの１冊である。

評者である私は、ナチス・ドイツに追われて英国に亡命した後のカール・マンハイムの政治社会思想研究に従事している。ファシズムを生み出した大衆社会の構造を分析し、「自由のための計画」を提唱して全体主義独裁と対峙した亡命知識人マンハイムにとって、「ムート」は英国で自らの社会再建構想を練り上げるのに重要な場であった。私も以前から「ムート」をきちんと研究しなければならないと考えていたし、マンハイムとＴ・Ｓ・エリオットについては過去のいくつかの拙稿で触れた。が、一次資料の収集に本格的に着手したのはここ

数年のことである。そのような評者にとって本書の刊行はタイムリーであり、「ムート」についての有力な先行研究のひとつになるだろうと大いに期待して本書を手に取った。もちろん評者は著者クールベルクと異なり神学者ではないし、いわゆるモダニズム研究の領域にも通じていない。本評はあくまで評者なりの関心・視点からのものである。

「ムート」に関しては、本書の刊行に先立つこと10年前、オールダムの伝記的研究を著した神学者キース・クレメンツが編集した『ムート文書 ── 信仰・自由・社会　1938～1944年』(*The Moot Papers: Faith, Freedom and Society 1938-1944*, London: Bloomsbury T&T Clark, 2009) という書物が世に出ている。740頁に渡るこの文献は「ムート」の研究書ではなく、第1回から第20回までの研究会合で残されている議事録を収録したものであり、クレメンツによる「ムート」メンバーについてのプロフィールや各研究会が開催された時の時代情勢、またそれぞれの回で報告されたペーパーの要旨などの解説が付されている。1944年までの「ムート」における議論の貴重な一次資料を集めたものと言ってよい。だがこの文献はほぼ、エディンバラ大学ニューカレッジ図書館に所蔵されているオールダム・コレクション内の「ムート文書」にのみ依拠しており、各地に散在している「ムート文書」を網羅してはいない[1)]。他方、クールベルクの本書は、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究院、キール大学、リーズ大学等に眠る「ムート文書」のほか、エリオットやマンハイムをはじめとする「ムート」メンバーの書簡やＢＢＣ文書館に保管されている関連資料などを広く渉猟した上での研究となっている[2)]。まずこの点からのみ見ても、本書はおそらく初の本格的な「ムート」研究の書と考えてよいであろう。以下、各章ごとの論点を概説しつつ、コメントを加えることにしたい。

1）ここで評者が「ムート文書」(the Moot papers) で意味するものは、「ムート」参加者が各研究会合での発表のため準備したペーパー類、それに対する応答やコメント、また折に触れてオールダムがメンバーに送ったメモランダム、等のことである。

2）クールベルクはすでに2013年の以下の論文で、従来の「ムート」研究が一次資料たる「ムート文書」を十分に活用してこなかったことを指摘している。Kurlberg, J., “Resisting Totalitarianism: The Moot and a New Christendom”, *Religion Compass*, Vol. 7, No. 2 (2013).

Ⅱ

本書の意図は、「ムート」を1930～40年代の歴史的コンテクストに置いて理解しようとすることにあるが、第1章「序論」ではそのための明確な方法論が示される。それは、ファシズム研究で著名な英国の近代史家ロジャー・グリフィンの「モダニズム」概念を基本的枠組みとして用いることである。著者クールベルクの理解では、モダニズムは芸術や文学にのみ関わる概念ではなく、「政治的モダニズム」と呼ぶべきものがある。グリフィンの前提は、モダニズムの持つダイナミズムは「退廃と刷新（decadence-and-renovation）」と解釈でき、それは美的領域にとどまらずその時代のおびただしい社会運動に見出すことができる、ということである。啓蒙主義以来のヨーロッパ近代は、工業化とレッセ・フェール的自由主義を通じて、文化的・社会的・政治的に危機を迎えている（退廃）。グリフィンが「プログラム的モダニズム（Programmatic Modernism）」と呼ぶもの ── つまり政治的モダニズム ── は、社会を変革すること、新しい時代を開始すること、社会的現実と政治システムを根本から変えること（刷新）を含意している。その意味でナチズムやファシズムは、一般的に言われるような反近代的「反動」ではなく、未来の別様のモダニズムに向けての運動だったと解釈できる。つまり、神秘的な過去を持ち出したり、神話のような超越的な理想・理念に訴えるファシズムは、近代社会の社会的・道徳的な断片化に対抗し、社会を再活性化することで新しい社会をつくり出そうとする、一種の政治的モダニズムだったというのである。

クールベルクは、こうしたグリフィン的な「プログラム的モダニズム」概念を援用する際、グリフィンがモダニズムからキリスト教を除外している点を批判する。クールベルクによれば、「近代化（modernization）」と「世俗化（secularization）」が必然的に結びつくという前提にはもはや立てない。確かに従来のスタンダードな説明では20世紀は「世俗化の時代」とされてきたが、しかし英国の歴史を丹念に紐解けば、1950年代まで教会の影響力は強かったのであり、「世俗化」論は疑ってかかる必要がある。クールベルクは、本書のタイトルにある通りキリスト教的モダニズムというものが存在するとの立場に立ち、「退廃と刷新」というモダニズムの枠組みの中に「ムート」を「プログラム的モ

ダニズム」の例として位置づけ解釈することを提唱する。

以上のような視角と枠組みが第１章で説明された後、第２章「ムートと文明の危機」では、「退廃と刷新」という枠組みの中の「退廃」の言説と「ムート」とが深く関わっていることが検討される。従来の研究では、1930年代の「危機」が、精神的・宗教的な言葉で語られていたということが見落とされてきた。実際には、ラインホールド・ニーバーやウィリアム・テンプルといった影響力の大きなキリスト教思想家がこの時代の「危機」を語っていたのであり、「ムート」に関わった著名な知識人たち ── 前述のオールダムやエリオットのほか、ジョン・ミドルトン・マリー、クリストファー・ドーソンら ── もまた「危機」についての言説に直接さまざまな貢献をしていた。つまりクールベルクによれば、「退廃」に関する1930年代の言説は実に、社会的に影響力のあるキリスト教思想家たちによって形作られていたのであり、文明の危機をもっぱら経済や政治の面から理解し精神的な次元を無視するのは事実の矮小化になる。近代の物質主義、レッセ・フェール的自由主義、エゴイスティックな個人主義、ニヒリズム、全体主義、戦争 ── 等々の危機に対して、「ムート」メンバーは果敢に発言していたが、これは両大戦間期の「退廃」言説に対する「ムート」による応答だとクールベルクは見る。つまり「ムート」は、「退廃と刷新」というダイナミズムを持つキリスト教的モダニズムの実例として理解できるというのである。

第３章「キリスト教世界の再生」ではさらに、「ムート」がグリフィンの言う「プログラム的モダニズム」に当てはまるとの論証が試みられる。ここでクールベルクは、グリフィンも参照する人類学者アンソニー・ウォーラスの「再活性化運動(revitalization movements)」概念を補助線として用いることで、「ムート」は両大戦間期の方向性喪失を乗り越えるためのこうしたモダニスト的な運動の事例であると主張する。その際、クールベルクは「ムート」の２つの面に着目する。一方の面は、「ムート」が中世キリスト教世界をモデルとしてさまざまに議論した事実である。これは前述の「神秘的な過去」に当てはまるという。「ムート」メンバーが研究会の初期段階で読んだのは、同時代のフランスの新トマス主義者ジャック・マリタンの『真正なるヒューマニズム』(*True Humanism*)[3] であり、「ムート」の中心者オールダムの思考には後々までマリタンの影響が見られると指摘される。もちろん「ムート」メンバーは、20世紀ヨー

ロッパを中世キリスト教的世界に戻すことを考えていたのではなく、中世キリスト教の理念を現代社会にどのように活かすかを議論した。もう一方の面は、「退廃と刷新」の後者「刷新」に当たるものとしてマンハイムが提唱した社会計画論である。社会学者マンハイムは「ムート」第２回研究会に初めて参加し、第３回研究会でペーパー「自由のための計画」を発表したが、これは「ムート」におけるほぼ唯一の政治理論と見なされる。クールベルクは、「退廃」という近代の危機を乗り越えるべく中世キリスト教という「神秘的な過去」の検討から着手し、かつ、「刷新」としての「自由のための計画」論をひとつの中心理論として持つことになった「ムート」を、キリスト教世界の再活性化を目指す「プログラム的モダニズム」の運動と理解できると主張する。

第４章「『われわれはなぜゲシュタポを嫌うか』── 自由主義・全体主義・第三の道」では、以上のような性格を持つ「ムート」を全体主義という時代の文脈の中で理解する試みがなされる。クールベルクは、「ムート」をキリスト教全体主義を目指す運動だったと見なす先行研究があることを念頭に置きつつ、彼なりに「ムート」と全体主義の関係性を問い直そうとする。マンハイムの「自由のための計画」が、レッセ・フェール的自由主義でも独裁でもない「第三の道」として構想されたことはよく知られているが、レッセ・フェールの崩壊への応答としてファシズムと全体主義が登場したという時代診断は、1930年代の英国知識人にそれなりに共有されたものだったことがここでは示される。その文脈の中で、階層的秩序や権威を重視するカトリック教徒のドーソンや、やはり秩序を重んじナショナリズムや権威主義に傾倒する保守的なエリオットが、社会の解体をもたらした自由主義への批判という次元からファシズムに惹かれていたことが語られる。また「ムート」内にも、社会的技術を駆使してのプロパガンダや教育を通じて短日月に全体主義を成功させたヒトラーから学ぶべきものがある、という議論があったことにも言及される。しかし、ファシズム体制に見られる暴力や抑圧を支持する「ムート」メンバーは当然ながらいない。ここでは、「ムート」における全体主義の理解が主に「中央集権化」という意味であり、そうした趨勢は社会的事実として受け入れるしかないという議論がメ

３）フランス語での原著は、1936年刊行の*Humanisme intégral*である。

ンバー内にあったことが指摘される。ハンナ・アーレントや現代の政治哲学者が考える、テロル・暴力に基づく非民主的な体制としての全体主義とは、同じ「全体主義」でも語られた内容が異なるとクールベルクは注意を促している。

Ⅲ

続く第５章「モダニズムに照らしての対立 ── Ｔ・Ｓ・エリオットとカール・マンハイムの対話」では、「退廃と刷新」というモダニズムの枠組みが個々の「ムート」メンバーにも当てはまる見本として、本書のサブタイトルに明示されている２人の社会思想家に焦点が当てられる。詩人エリオットは1930年代には大衆社会での文化の退廃を憂慮する社会批評家としても著名であったが、マンハイムの大衆社会論と言うべき著作『再建期における人間と社会』と『現代の診断』の書評を執筆したほか、マンハイムの死去の際には追悼文を寄せている。従来の研究では、「ムート」においてエリオットはマンハイムのよき理解者であったと見なされる傾向があった。それに対してクールベルクは、「ムート文書」が先行研究ではほとんど検討されていないと改めて指摘[4)]。エリオットは個人的にはマンハイムに一定のシンパシーを感じつつも、しかし「ムート」における実際の両者のやり取りやエリオットの知人への書簡などから見えてくるのは、むしろ２人の思想家の緊張関係であるという。近代のレッセ・フェール的自由主義が民主主義と文化に危機をもたらしたという「退廃」の面に関する時代認識と、それを克服しようとする「刷新」への意図は、エリオットとマンハイムにほぼ共有されている。その意味で両者ともモダニズムに位置づけられる。だが、「プログラム的モダニズム」というレンズを通して見えてくるのは、むしろ「自由のための計画」に対する両者の考え方の違いであるというのである。

4）なお、クールベルクがここで指摘する先行研究とは、主にマンハイム研究である。エリオット研究においては、「ムート文書」が活用されている例をいくつも見出すことができる。もっとも古典的なものは以下の文献であり、「ムート文書」の発掘が満足になされていなかった時代には「ムート」についてまとまって知ることができるほぼ唯一の研究書であった。Kojecky, R., *T. S. Eliot's Social Criticism*, London: Faber & Faber (1971).

例えば、マンハイムが文化をエリートによって創出されて社会に拡散しゆくものと考えるのに対し、エリオットにはそれはあり得ない。彼にとって文化的退廃を見せる大衆社会において重要な課題は、前の時代の文化的遺産を次の時代に継承することであり、その際に鍵となるのはエリートよりも階級ないし家族である。マンハイムのようなエリート主義は、エリオットの目には原子論に映る[5)]。また、マンハイムが「自由のための計画」に宗教が重要な役割を果たすと考えたことについて、エリオットは賛同するよりむしろ、「計画」という社会的な目的のためにキリスト教を「手段」ないし「機能」と考えるマンハイム的な議論は容認できなかった。「ムート」メンバーの多くが、啓蒙思想に見られる人間中心主義を批判し、それを乗り越えた新しいキリスト教世界の再生を目指していたのに対して、マンハイムの場合は、レッセ・フェール自由主義を批判するにせよ近代啓蒙をまるごと放棄してはいない。エリオットから見れば、世俗的なユダヤ人社会学者マンハイムはキリスト教の教義に対する信仰を有していない。エリオットにとっては、いかなる宗教も、信仰を持たない外部者から十全に理解されることはない。クールベルクの理解では、政治的モダニズムたるべき「ムート」に必要な政治理論をマンハイムが用意したとすれば、それに対してエリオットの社会批評は自らの信仰に基づいており、先のドーソンと共に政治を超越した（beyond politics）指向性を持つものだった。クールベルクは、エリオットが当初からマンハイムの「自由のための計画」に批判的だったのみならず、徐々にマンハイムが「ムート」の中で重要な位置を占めていくことに危惧の念を抱いていたことを明らかにしている。

第６章「再活性化運動としてのムート」では、改めて再活性化運動という視点から、「ムート」が実際にどのような社会運動として展開されたのかが語られている。ここでのクールベルクの主張は ── 従来の研究で「ムート」は一種のシンクタンクとか討論グループと表現されてきたが、実際にはそうした枠組みに留まらない、いわばキリスト教文化革命を目指す運動だった、というもので

5）ここで図らずもクールベルクは、英国期マンハイムの思考の前提に、ドイツ期知識社会学における「自由に浮動するインテリゲンチャ」論があることを言外にほのめかしている。

ある。ここでは、ファシズムと対峙する「党」のようなものとして「ムート」を位置づけるマニフェストを作ろうとするオールダムの努力、それと関係して行動する知識人の連帯をつくり出そうとする「Order」と呼ばれる組織の構想[6]、1944年のバトラー教育法の実現に「ムート」メンバーが少なからぬ影響力を発揮した事実、「ムート」の研究会合での議論を社会に広めようとするさまざまな取り組み ── 定期刊行物『クリスチャン・ニュースレター』の発行や、ＢＢＣとの連携 ── 等が（いささか詰め込み気味に）述べられるが、それ自体としてはさほど新しい情報はない。クールベルクは、「ムート」をオールダムを中心とする私的な討論サークルだとする従来型の理解を越えるべく、「ムート」の取り組みを、社会の再活性化を目指して果敢に思想を発信する運動だったとして紹介している。だが、「ムート」を「党」のような組織にしようとする「Order」の構想については、メンバーの間でついに意見の一致を見ることがなく、「ムート」の成果のほとんどは結局メンバー個々人の著作や論文であったという。「ムート」はキリスト教的モダニズムの有力な試みであったものの、「プログラム的モダニズム」の運動としては最終的に失敗だった、というのがクールベルクの行きついた評価である。

最終章である第７章「結論」では、1947年のマンハイムの急逝によって「ムート」が終焉を迎えたという周知の事実が語られるだけでなく、「ムート」メンバーであった思想家たちの間でその後長く続く知的友情 ── 例えばオールダムとマイケル・ポランニー、アドルフ・レーヴェとジェフリー・ヴィッカーズなど ── に言及されている。しばしば、「ムート」は亡命者マンハイムには知的な居場所として非常に重要だったが、他のメンバーにはマンハイムにとってほどの重要性はなかった、と言われてきたが、必ずしもそうとばかりは言い切れないことが示されている。クールベルクは、「ムート」で語られた「近代の文化の危機と宗教」という問題は第２次世界大戦後には忘れられ、福祉国家建設に向けた経

6）評者はクールベルクの本書の出版の前年に、以下の論稿で「Order」について一定の検討をしたことがある。拙稿「カール・マンハイムの『自由のための計画』論における『Order』── ムート文書に見る知的エリート集団の構想」（上・下）、『創価法学』第48巻第１号、第48巻第２号（2018年）。クールベルクの本書の刊行によって、評者はこの拙稿での議論がいかに不十分なものであったかに気づかされた。

済的な議論と、冷戦開始に伴う政治イデオロギー的な議論に道を譲ってしまったと指摘する。しかしながら、21世紀の現代の新自由主義がもたらす危機や極右的なポピュリズムの台頭、終末論を思わせる環境破壊、等々は、かつての「ムート」でのもろもろの論点がヨーロッパで再び前景化されつつあることを示しているのではないか、と述べて本書を閉じている。

Ⅳ

従来のさまざまな研究における「ムート」の扱いが主に、メンバーであった思想家・理論家に個別に光を当てるものだったとすれば、本書は「ムート」それ自体を研究の俎上に乗せようという試みと言える。「ムート」を包括的に研究しようとすれば、例えばどの回の研究会で誰がいかなるペーパーを発表し、それをめぐりどのような議論がなされたのかについて、その時々の社会情勢・国際情勢に照らして検討するという歴史的研究も考えられる[7)]。それに対して本書は、もちろん1930～40年代の歴史的文脈に「ムート」を位置づけるという意図はあるものの、「退廃と刷新」というモダニズムのダイナミズムを枠組みとするという方法に基づいて、時系列的な歴史的研究とはまた異なった形で「ムート」像を描き出そうとしている。世俗化論への批判の上にキリスト教的モダニズムの可能性を論じ、全体主義を生み出した近代の危機と対峙しようとした「ムート」を「プログラム的モダニズム」の実例として位置づけようとする論理展開は、周到であると言える。「ムート文書」の多くは散逸してしまっていると考えられる上に、現在利用できる一次資料についても、多彩な論者が準備したペーパー類を検討するだけでは地図なき旅路のようなものであり、それらがどのような文脈の下で語られたのか容易にはつかめない。本書は、約10年間の「ムート」の議論を理解する上での有力な導きの糸を与えてくれるものであり、今後の研究において必ず参照されるべき労作と言っても過言ではあるまい。

しかし、「ムート」そのものを研究対象としたクールベルクの意図ゆえにやむ

7）一次資料が限られる中でのこの研究方法を考えれば、本稿の前半で触れたクレメンツ編『ムート文書』はやはり重要な文献である。

を得ないことではあるが、メンバー１人１人の思想・思考についての掘り下げはなされていない。特に、マンハイム研究者としての評者の目から見れば、本書のサブタイトルにマンハイムの名が明示されているにもかかわらず、彼のニュアンスに富んだ思想への理解が十分でないことは不満として残る。クールベルクが本書で「ムート」内でのマンハイムの言説を掘り起こしたことは非常に貴重だが、しかしそれらをマンハイム自身の持つ思考法と結びつける作業はほとんど見られない。例えば本書では、マンハイムが唱えた「自由のための計画」はほぼ中央集権的なコントロールという面からのみ解釈されているようだが、これはマンハイムの「計画」概念を十分に検討しないで激烈に批判したフリードリヒ・ハイエクと大差ない理解と言わざるを得ない。また、エリオットやドーソンがマンハイムの「計画」論に批判的であったことは語られているが、マンハイムの構想に肯定的だった教育学者フレッド・クラークや哲学者Ｈ・Ａ・ホッジスについては断片的な言及にとどまっている。本書で言う「プログラム的モダニズム」運動として「ムート」を位置づけるのに「自由のための計画」論が重要であったことは分かるものの、しかし「ムート」内でも賛否が分かれたマンハイムの構想がなぜ「ムート」の基礎的な政治理論と呼べるのか、またマンハイムがなぜ「ムート」で中心的な役割を担うまでになったのか、等々の問いに本書は十分に答えてはくれない。一次資料の発掘・渉猟は大いに敬意に値するが、これまで不当なまでに研究対象とされてこなかった英国期マンハイムの思想や思考にアプローチするものとしてはいかにも物足りない。

以上のことを、神学者であるクールベルクに求めるのは筋違いかもしれない。その意味では、評者が先に触れた歴史的研究、あるいは思想史的研究は、なおも別に必要となるだろう。もちろんこのコメントは、決して本書の価値を下げるものではない。クールベルクが明らかにしてくれた「ムート」のありようをマンハイム研究へと活かしていくことは、評者自身に課せられた大きく重い宿題である。

（本学国際教養学部教授）